

聖書:ルカの福音書15章11～24節

説教:私は天に対して罪を犯しました

はじめに

きょうはこの後、児玉浩兄の洗礼式を予定しております。人が救われることは、考えてみると誠に不思議なことだと思います。神はどのようにして私たちを救おうとされるのか。今朝は、放蕩息子のたとえ話しの所を開きながら考えていきます。最初に種明かしをすれば、ここに出てくる父親は神であり、父の家を飛び出した弟息子は私たちのことを指しています。今日は二つのポイントに目を留めていきます。一つ目、17節にある「我に返った。」これはどういうことか。二つ目、この息子はこう言っています。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。」このせりふを二回言っている。これはどういうことか。そこから神の愛とはどのようなものであるかをひもといてまいります。

1 弟息子

1) 財産を下さい

聖書の時代、息子がまだ元気な親に向かって「財産を分けてくれ」と言うのは、「お父さん、早く死んでください」と言うのも同然で、親を侮辱することだったそうです。ですからこの弟息子は、ふつうなら勘当されても文句は言えない。ところがこの父親は何も言わず弟息子に財産を分けてやる。これを読んでみなさん思うはずです。こんなふうに息子の言いなりになって甘やかすからいけないのだ。息子が家に帰ってきたときも、叱らないどころか何も言わないで抱きしめ、大喜びして盛大な宴会まで開く。いったいこの父親は何を考えているのか。理解に苦しむ人もいるでしょう。でも、先ほど言いましたように、この父親は神を現しています。そうすると、神は私たちがどんなに悪いことをしても全部帳消しにしてくれる、まことに都合のよい方なのではないでしょうか。

そのことは弟息子のことを見ながら考えていきます。この息子は父親から財産を分けてもらおうと、ささっと家を飛び出し、予想どおりに全部使い果たしてしまい、食べるのにも困るような状態になってしまいます。ここまで読んで皆さんはこう思ったでしょう。「自業自得だ。人の金ばかりあてにして人生楽しく遊ぼうなどと考えているような人間は、一度ひどい目にあえばいいのだ。」同情する人はいないでしょう。

2) 我に返った

さてこの息子この後どうしたか。17節から19節を読みます。「しかし、彼は我に返って言った。

『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』」

食べるのにも困り果てたとき、この息子は「我に返った」というのです。今日一つ目のポイントがこれです。ふつう「我に返る」というと、ハッと間違っていたことに気がつき正しい道に戻る、そんなことを思い浮かべます。「私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。」自分は罪を犯したと言ってるので、さすがにこの息子は心を改めたのかとも見えます。

でもよく読んでください。そもそも彼が父のもとに帰ろうとした動機はなにかです。ひとこと言えば腹が減ったからです。父のところにはパンが一杯ある。あそこなら飢え死にすることはない。だから帰ろう。なにか動機が不純だと思いませんか。家を出るときは父親が死のうがどうしようが関係ない。そういうことを平気で言う性根の腐った人間です。それが腹が減ったくらいで心を入れ替え、まっとうな人間になるとはとても思えない。

そうすると、週刊誌ふうに言えばここで「疑惑」が生じる。弟息子はこう考えたのではないか。家に帰ってパンを分けてもらおう。でもさすがに手ぶらで行っても、父は怒って家に入れてくれないだろう。どうしよう。そうだ。父の気に入るセリフを言えばきっと赦してくれるに違いない。それが18、19節にことばだった。そうして家に帰る旅の道すがら、なんどもこのセリフを練習して間違わないように準備します。

2 父

1) かわいそうに思った

さて父親はどうしたか。20節後半。「ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。」

父親をだましてなんとか家に入れてもらおうと画策しながら帰ってきた息子だったのですが、父親は息子の悪巧みに気がつかないのか、見つけると、かわいそうに思っとなりふりかまわず駆け出していった。ここで「かわいそうに思った」と訳されていることばですが、はらわたがねじれるくらい悲しく感じた。そのようなことばです。そんなふうにかわいそうに思ったというのです。でもどうでしょうか。腹を立てて追い返すか、そこまでしなくても不機嫌な顔をして叱りつける。普通の父親ならそうするでしょう。ところがなんと、かわいそうでかわいそうで首を抱き、口づけまでした。明らかに父親は息子を赦しているのです。どこまでお人好しの父親なのか。これでこの息子は味をしめて、また悪いことをするに違いない。そんなことまで考えてしまいます。

2) 「私は天に対して罪を犯した」

そんな父親を見ていた息子はどうか。21節。「息子は父に言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。』」

19節と比べてください。字面だけ見るとほとんど同じ。これをどうとらえるか。これが今日の二つ目のポイントです。息子は当初、自分が帰ったら父親が腹を立てるだろうと予想していました。その怒りを鎮めるために、自分が悔い改めて戻って来たのだということをアピールしようと準備しました。それで父親が喜びそうなセリフを考え、練習してきた。

では実際はどうなったか。まさか父親が駆け寄ってきて、文句を言うどころか、むしろ喜んで自分の首を抱き、口づけまでする。これはまったく予想もしていなかったのが驚いた。いやとにもかかわらず、心配していたことは全部クリアになり万事うまく行った。これで家に入ってパンを食べることが出来ます。もう準備してきたセリフを言う必要はありません。そこでおしまいにしてよい。心の中で万歳と叫ぶところでしょう。

ところが話しはそこで終わりません。息子はこう言うのです。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。」

この際、お父さんの機嫌をとるために言っておこう。そんなわけではもちろんない。この息子に何かが起きたのです。「親爺なんか死んでしまえ」と言ったひどい息子だったのに、こんな惨めな姿になった息子をかawaiiそうに思って涙を流して泣い

てくれている。すべてを赦して、ただ父親のもとに帰ってきてくれたことを心から喜んで迎えてくれている。底知れぬ父親の愛の深さに圧倒されてしまいました。自分は赦されているのだとわかったとき、不思議なことですが、この息子は初めて自分の罪の大きさに気がつき、打算的な思いからではなく、心の底から罪の告白をしていった。こうしてこの放蕩息子は罪から救われていきました。

3 神

1) どんな理由でも父のもとに戻るなら

イエスはたとえ話を通して、どんなにひどい罪人であろうとも、父親のところに帰ることをどれほどに喜んでくれる方であるかを教えてくださいました。でもどうでしょうか。こんなひどい息子は簡単に赦すべきではない。どこかで釈然とした思いを感じたのではないですか。そもそも、腹が減って困ったので食べ物がたくさんあるから父のもとに帰ろうとした。そんな不純な動機で帰っても赦されるはずはない。みなさんそう思っていたでしょう。ところがここにあるとおりです。どんな動機でもよい。とにかく神のもとに帰ろうとする者を、神は無条件で喜んで受け入れてくださる。

2) イエス・キリストの愛を身に受けて

でも私たち教えられてきました。罪の告白をしなれば赦されない。そのとおりです。どんなときでもこの原則は変わりません。ではこの放蕩息子はどうかだったのか。まだ遠くにいたときに彼が言ったことば、「お父さん、私は天に対して罪を犯しました。」これが罪の告白だったのか。いいえ。あくまでもこれは父親をだますための嘘に過ぎません。そうではない。父親の愛にしっかりと抱かれたときに、感極まって告白した21節こそ、本当の罪の告白でした。

そうするとこういうことになる。神のもとに帰ろうとするというのなら、どんな動機でもかまわないということです。神はまるで愚かな父親のようになって、息子にののしられても心から赦し、息子の悪巧みにもまったく気がつかないような態度をとり、ただただ息子が帰ってきたことを喜ぶ。そんな父親の手にひしと抱かれたとき、私たちのうちに大きな衝撃が走ります。次の瞬間、心の底から自然にことばが出て来る。「私は罪人でした。」

神のひとり子であるイエス・キリストの十字架に立ち戻るとき、私たちはそこで神の愛の深さに圧倒され、罪の告白に導かれて行く。そういう順

番で救われることがある。神の救いの方法は私たちの思いを越えてはかりしれない。

私たちはキリストを通して知らされる愛に導かれて歩んでまいります。